

プレスリリース

若手彫刻家の登竜門 第4回本郷新記念札幌彫刻賞

受賞作品決定!!

受賞作品

作家名：藤原千也 (ふじわら かずや)
(北海道中札内村在住、45歳)

作品名：太陽のふね

素材：樹木(ポプラ、エゾマツ等)、樹皮、
鉄(骨組みとして)

サイズ：高さ380×幅340×奥行1,900cm



渡り廊下から見たイメージスケッチ
地中に大部分が埋まった巨木の姿を表現し、その空洞化した内部の間に、ある時刻だけ光の帯(光の舟)が現れる作品

2024年5月中旬～2027年4月末まで
札幌芸術の森美術館中庭に展示

札幌市と本郷新記念札幌彫刻美術館が主催する本郷新記念札幌彫刻賞の第4回の受賞作が、18件の応募作品のなかから、酒井忠康氏(世田谷美術館館長)をはじめとした6人の選考委員による厳正な選考によって、決定しました。

受賞作品は、来年2024年5月中旬から3年間、札幌芸術の森美術館中庭に設置されます。

また、受賞者には、賞金100万円が贈られるほか、来年9月から本郷新記念札幌彫刻美術館で受賞記念展が開催され、その出品作品の制作費として50万円が贈られます。

■作家プロフィール

1978年 札幌市生まれ
2002年 大阪芸術大学美術学部立体造形学科卒
2013年 JRタワーアートプラネッツグランプリ展(JRタワープラニスホール/札幌)
「道東アートファイル2013 in the LIGHT / in the SHADOW」(北海道立帯広美術館)
2014年 「防風林アートプロジェクト2013-14」(帯広)
2018年 北海道教育大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修空間造形研究室修了
2020年 第23回岡本太郎現代芸術賞展特別賞受賞(川崎市岡本太郎美術館/神奈川)
十勝文化団体協議会文化奨励賞受賞
2021年 札幌美術展 アフターダーク(札幌芸術の森美術館)
2022年 道銀芸術文化奨励賞受賞



■作家の受賞コメント

今本当に自分が何を感じているのか、本当に何を見たいのか。そのことだけを何度も何度も探り掘り、練り直し、やっとたどり着いた作品プランでした。何よりも選んでくださった方々と共鳴できたことが心から嬉しく、これからの糧としたいと思っています。

太陽という生命と、地球の奥と私たちがつながり合う瞬間を鑑賞者の皆様と共有できる日を楽しみに制作してまいります。いつも応援してくださっている皆様のおかげです。本当に本当にありがとうございます。今後とも共にどうぞよろしく願いいたします。

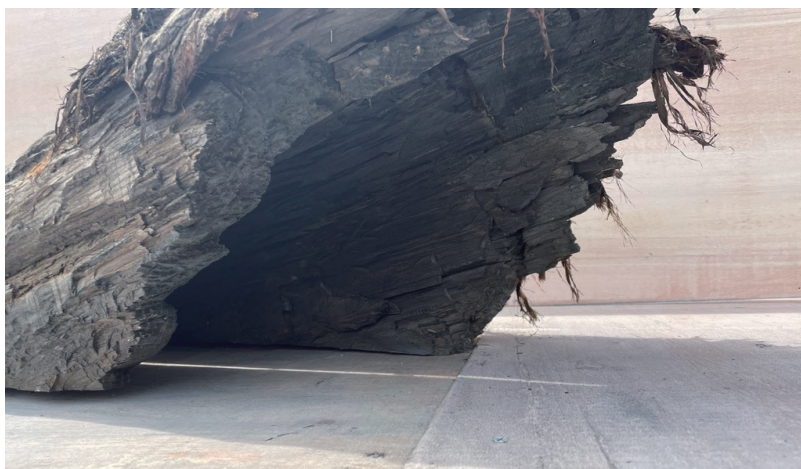
■作品コンセプト

太陽と地球の奥がつながりあう場所に入りたい。樹の内側に潜り彫る制作途中で、その繊維の一つ一つがつらなり、うねるように爆発する生命の内側にいて、この樹のように地中と太陽の間に立っていることを感じたいと思ったことが制作への強い動機です。

巨大な樹木が目の前で倒れ、大部分は地中に埋まり、空洞化した内部は闇に包まれています。この樹木の内側に長さ数十メートルに及ぶ光の舟が現れます。一日に数時間～数十分だけ、樹木(作品)上部に入った割れ目から太陽光が差し込み現れる光の舟は、闇の中に現れ、また静かに移動しながら消えていきます。地球の奥に還っていく樹と光にもどっていく魂の永い一瞬を、生命の内から見る場所です。

倒れた巨木は、現代に対して持っている私の感触を表しました。もっと良い社会になるはずだったと漠然と思い、孤独や茫然とした絶望を感じるのはなぜか。希望を見出せないのはなぜか。終わらない戦争、止まらない環境破壊、多様性の中で倫理観が迷い、くだらないニュースも笑い飛ばせずに、胸を締め付け続ける。複雑化した問題の様々な、考えることができずにいる。もう、とっくに倒れているかもしれない現代という名の樹木、それでも日々を生きなければならぬ私たちは、何を信じて、何を見たら良いのだろう。

本当の光を見たい。巨大な生命の光をみたい。その実像を見るため、太陽と、地球の内側に沈んでいく巨樹の間に入ることで、叶えられるかも知れなく、さまざまな人の生命を強めることができるかもしれないと思っています。



1/10スケール模型

札幌芸術の森美術館中庭と作品の1/10スケールの模型を制作し、実際の太陽の光の入り方や渡り廊下からの見え方を検討し、最適な設置位置と設置角度が割り出されている。

■選考委員講評

[選考委員長] 酒井忠康(世田谷美術館館長) [選考委員] 建畠 哲(草間彌生美術館館長)、植松奎二(彫刻家)、阿部典英(美術家)、佐藤友哉(美術評論家、前札幌芸術の森美術館館長)、吉崎元章(本郷新記念札幌彫刻美術館館長)

全体として、審査するのが楽しかった。これまでの地下空間ではいろいろと制約があったが、今回は多様な作品の応募があり、新しい実験的な試みのアイデアが出てきてよかったと思う。受賞作は、木が倒れているだけではなく、そこに太陽と地球と見る人のかかわりを考えてあり、コンセプトがしっかりしていて面白い。(植松奎二委員)

前回の受賞作「ザブーン」はポップな作品であったが、今回は一転して重厚でスケールの大きいものとなっている。設置場所と条件の変更を反映して、方向性が大きく異なったものが選ばれ、存在感を示すのではないか。空洞、木のほらのなかなどは、現場で体験しないとわからないものであるのが楽しみである。(建畠哲委員)

建築図面を入手し、壁の高さや方角などを含めて、かなり綿密にこの場所に適したプランが組み上げられている。屋外設置であることが強く意識されており、3年の間に木の色が灰色に変化していく様や雪が積もった姿なども楽しみな作品である。(吉崎元章委員)

■本郷新記念札幌彫刻賞について

本郷新が全国各地に数多くの野外彫刻を設置した功績を記念するとともに、自分を越えて多くの若い彫刻家が育ってほしいという願いを受け継ぎ、50歳未満の彫刻家を対象として、多くの人の目に触れる場所に作品を設置する機会を提供する全国公募の賞です。第1回から第3回までは札幌中心部にある「大通交流拠点地下広場」、第4回は札幌芸術の森美術館の中庭を設置場所としています。

1983年から2011年まで隔年で15回にわたり、全国に設置された最も優れた彫刻を賞してきた「本郷新賞」の後継の賞です。

■今回の募集の特徴及び応募状況について

全国に彫刻のコンクールはいくつかありますが、場所を指定し、そこに設置する作品のプランを継続的に募集するのはこの賞のみです。これまでは大通の地下空間を設置場所としてきましたが、今回は札幌芸術の森美術館の中庭に変更しました。

空間が広くなり、作品のサイズや重量、素材の制限が大幅に緩和された一方で、風雨や降雪に晒されながら屋外に3年間設置できる耐久性が要求され、経年的な変化も受けることとなります。その条件をどのようにとらえて、いかに作品とかわりをもたせるかが大きな鍵となるものとも言えます。

今年3月末から9月3日までの応募期間に、全国から18件の応募がありました(前回13件)。そのうち北海道外から11件の応募があり、前回の4件から大きく増えています。

■これまで受賞作



第1回 (2014年)
《凹みスタディー 琴似川北12条西20丁目ー》
谷口顕一郎
[設置場所] 大通交流拠点地下広場
[設置期間] 2015年2月～2018年1月



第2回 (2017年)
《improvisation~うけとめるかたち》
加藤宏子
[設置場所] 大通交流拠点地下広場
[設置期間] 2018年2月～2021年1月



第3回 (2020年)
《ザブーン》
高橋喜代史
[設置場所] 大通交流拠点地下広場
[設置期間] 2021年2月～2024年1月(予定)

■今後のスケジュール

- ・授賞式 10月26日(木) 11:00～札幌市役所本庁舎10階 市長会議室(予定)
(本郷新記念札幌彫刻賞 100万円、受賞記念展作品制作費 50万円を授与)
- ・作品搬入・設置 2024年5月中旬
- ・作品展示 2024年5月中旬～2027年4月末(予定)
- ・受賞記念展 2024年9月～12月(予定) 本郷新記念札幌彫刻美術館にて開催

画像提供

受賞作品のイメージスケッチ、模型、作家顔写真の画像データが提供可能です。メールにてご連絡ください。

■お問い合わせ・ご連絡先

本郷新記念札幌彫刻美術館 館長 吉崎元章 (不在の場合は、梅村尚幸)

〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目

電話011-642-5709 fax 011-616-0900

メール m_yoshizaki@artpark.or.jp

美術館公式ホームページ
<http://www.hongoshin-smos.jp>
最新情報はSNSで更新中

